様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ１６８４２

研究課題名（和文）宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集

研究課題名（英文）A fundamental study and data collection for documenting the dialects of Miyakoan

研究代表者
林　由華（Hayashi, Yuka）

神戸大学・人文学研究科・助教

研究者番号：９０７４４４８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、宮古語諸方言の９地点（大神、狩俣、西原、佐良浜、久松、西里添、上地、来間、宮国）での自然談話の映像・音声の収録を行い、それに書き起こしや訳などのアノテーションを付与した動画資料を作成した。これらを広く公開するためのウェブサイトを整備し、そこで以前に収集したデータも含めて９つの動画・音声を公開した。これらの活動を地域の高校と協働で行い、言語ドキュメンテーションを地域コミュティーと協働で行うことの有用性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって、消滅危機に瀕した言語である宮古語の複数方言について、アノテーション付きの自然談話の映像・音声資料を作成・公開し、研究者をはじめ広く一般に使用することができる形に記録した。これは、方言差を含めた日琉諸語の実態やそれと共に育まれた文化を未来に残し、研究可能性を広げること、また失われていく地域文化の記録として地域の遺産や文化保持・学習のための素材になるという点で、学術的にも社会的にも意義を持つものである。

研究成果の概要（英文）：In this project, we recorded audio-visual and audio recordings of natural discourse at nine sites (Ogami, Karimata, Nishihara, Sarahama, Hisamatsu, Nishisazoe, Uechi, Kurima and Miyaguni) in the Miyako language dialects, and created video materials with transcriptions and translations annotated on the recordings. We developed a website to make these widely available to the public, and nine video/audio recordings, including data collected previously, were published on the website. These activities were carried out in collaboration with local high schools, demonstrating the effectiveness of language documentation in collaboration with the local community.

研究分野：人文学

キーワード：琉球諸語　危機言語の記録・保存　方言バリエーション　宮古語　話者意識に基づく方言境界

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

琉球諸語（琉球諸方言）は、相互理解性の有無と地理的・社会的相違に基づき、奄美・沖縄・宮古・八重山・与那国の５つに区分され、それぞれがさらにいくつもの下位方言を持つ、豊かなバリエーションを有した言語群である。これらは日本語の唯一の姉妹語群であり、既に研究の蓄積の豊富な日本語と合わせて、言語研究の各分野に大きな貢献が期待できるものである。しかし、地域によって大きな差はあるが母語話者層はおおよそ 1950 年代以前の生まれであり、 若い世代には継承されていない。多くの方言が、その実態がわからないまま消滅しつつあるという状況にあり、早急な調査研究および記録保存が求められている。

本プロジェクトでは、この琉球諸語のうち、宮古諸島（現宮古島市および多良間村）で話される宮古語諸方言の記録保存に関する調査研究を行う。宮古語諸方言には、明治期までに成立していた地域単位（大字）に基づくと、40 余りの方言があるとされる。近年の研究状況として、特に 2000 年代以降急激に記述的研究が進んでいる。個別的な現象の記述のほか、各方言における文法全般を扱ったもの[1][2][3][4]が年々蓄積されており、大規模な辞書も刊行された[5]。また、池間方言など、言語ドキュメンテーションの観点で多くのデータが公開されている方言もある[6][7]。諸方言全体を対象とした、比較のためのデータについては、1980～1990 年代の沖縄言語研究センターによる全集落調査とその補完であるプロジェクト（JSPS 科研費 22320086「琉球宮古方言の言語地理学的研究」）などにより、語彙や動詞活用などの項目についての調査がなされている。しかし、まだほとんど調査記述のない方言も多数存在している。

２．研究の目的

本研究では、消滅の危機にある宮古語について、豊かな方言バリエーション全体を記録保存するためのデータ収集、および記録のための社会言語学的基盤、電子公開の基盤の整備を目的とする。本研究期間内では、このために特に次の（１）（２）の２点を進める。

（１）話者の言語意識に基づく方言境界や方言グループを明らかにする

方言境界や方言グループはしばしば限られた特定の言語特徴を基に導き出される。しかし、本研究が明らかにしたいのは、「話者の意識としてどのように方言が区別されているか」である。これは、本研究の行う記録活動が「地域コミュニティのためのドキュメンテーション」という意味合いを持つためであり、記録を進めていく地点やその順番を決定するための基礎的研究となる。

（２）諸方言の映像付き自然談話資料を収集し、アノテーション付与・公開・保存する

本研究では、諸方言の映像付き自然談話資料の収集、アノテーション付与、公開を行う。言語は文脈の中で発されるものであり、映像を伴うデータは音声だけでは失われてしまう文脈を大きく補うものとして非常に有用である。逆に言えば、例えば現場指示の指示詞などの用法など、映像がないと全く理解できないケースもある。また、消滅危機言語の記録においては、その記録が言語研究者だけでなく地域コミュニティや他分野研究者などに広く長期的に利用できるものにすることが肝要である。地域におけるデータの活用という点から見ても、映像を伴うデータは様々な層の人に訴求力があること、人類学など別分野の分析においては音声より映像のほうが重要であることもあるなど、動画資料は記録方法として望ましい[8]。しかし、動画資料は、収録・公開に関して話者の心理的な障壁が音声資料と比べて格段に大きく、倫理的な問題をクリアするのが難しい。このため、公開可能な動画資料は、琉球全体を見ても、音声資料に比べてごく限られている。本活動では宮古島諸方言の豊かな方言を記録することを目指し、記録保存していくデータとして特に不足していると考えられる諸方言の談話資料、その中でも、自然談話の動画を中心的に収集し、書き起こしや訳などのアノテーション付きで公開していくことを目的とする。最終的にはすべての方言の記録を行うことを目指すが、本研究内においては、現実的な地点数として 12 地点での収集・公開を目標とする。また収集したデータを、プロジェクト終了時に言語アーカイビングセンター（ELAR など）にデポジットし、恒久的に保管されるようにする。

また、以上の活動を、地域コミュニティメンバー（地域の高校生）と協働で行うことも、本研究の手法であり、また目的のうちに含んでいる。目的としては、本活動を若い世代と協働で行うことにより、「若い世代が実際に祖父母以上の世代の言葉や地域文化に直接触れる機会をつくり、興味を持てるようにし、少しでも保存・継承に繋げる」というものであるが、これが手法の一部であるという点については、次の「３．研究の方法」で述べる。

３．研究の方法

（１）話者の言語意識に基づく方言区画の調査

方言境界やグルーピングを抽出するための質問票を作成し、それを基に各地の母語話者に聞き取り調査を行う。調査項目としては、主に話者自身が母語方言として話す言葉が用いられる最小範囲とそれを含む上位集合をきくものである。言語意識に基づく方言境界の調査は国内外に事例があるが[9][10]、まずはそれらを参考に予備調査票を作り、試行後調整し、本調査にうつる。

調査地点については、宮古島市内については 116 の行政区のうち自治会をもつ 73 区、および

多良間町は大字ベース（2 地点）での調査を予定している。宮古語諸方言の研究においては、専ら大字（明治期までに成立していた間切制の下位単位である村に基づく地域単位）が方言の最小単位として扱われる。大字ごとにことばの違いが現れるのは確かだが、この大字が常に方言の最小単位になっているわけではない。人々の生活単位である集落を基に設置された区画として現在の行政区があるが、大字の単位は、すべてそれと一致しているわけではない。本研究では、より細かい単位のベースとなると考えられる行政区を基本的な地点とする。対象者については、地点網羅を優先し、その地域の典型的な話者であることを確認しつつ、1 地点 1 名以上とする。

（２）諸方言の動画資料の収集・アノテーション・公開・保存

本項目の遂行には、主として以下 a～d の 4 つの解決すべき課題がある。

a. 動画資料の収集における話者の心理的な障壁
b. 言語差の大きい宮古語諸方言における自然談話への正確なアノテーション付与
c. 公開に際して生じうる倫理的な問題が生じない仕組み
d. 動画資料を誰にとっても見やすいように公開

以下では、これらにどのように取り組むのかという観点から、方法を述べる。

「３．研究の目的」（２）の最後に述べた地域の高校生との協働体制は、特に a を解決する方法としても機能している。すなわち、「地域の若い世代へ言葉を残すという形をとることにより、地域に向けて動画収録・公開という活動へのよりポジティブなイメージを作る」という効果が期待できる。また、教諭も含め、常に地域と連携する形をとることにより、b にかかる協力者探し、c にかかる度々に渡る話者や関係者への収録・公開許可を得る作業などが、信頼関係のもとよりスムースに行えるようにする。

また、d に関しては、現在あるドキュメンテーション公開用サイトを参考にしつつ、多数の方言についてのアノテーション付動画資料を見やすいレイアウトで示す、言語学習にも使いやすい形にするなどの課題をクリアする専用のウェブサイト作成を試みる。

４．研究成果

まず、研究期間全体として代表者の身体的理由による渡航不可能期間やコロナ禍の影響を大きく受け、特に「話者の言語意識に基づく方言区画の調査」については、予定通り進展させることができなかった。「諸方言の動画資料の収集・アノテーション・公開・保存」についても、当初新規に 12 地点での資料収集を目指していたが、全くの新規は 5 地点、2 回目以降の収録も含めると、9 地点での収集に留まった。しかし、話者コミュニティとの協働での記録・コンテンツ作成や、それを公開する手段としてのウェブサイト整備等については、十分な成果を得ることができた。

（１）話者の言語意識に基づく方言区画の調査

本期間内では、宮古語諸方言全体の方言境界やグルーピングを明らかにするには至らなかったが、研究上の問題点としてわかった知見や今後の課題も含めて以下に示す。

まず、

- 主として、神事を共同で行う／行っていた単位として、自治会を持ち、明治以前に成立した集落が基になっている行政区の単位で方言の違いが認められることが多い
- 中心地（大字でいう西仲宗根・東仲宗根・下里・西里の範囲）については、少なくとも現在の話者の言語意識として「互いに方言が違っている」という意識がほぼないといえる

ということが分かった。これらの知見は調査の途中段階で得られたものであり、結論には達していない。

期間内に調査が終わらなかったことについて、コロナ禍の影響なども大きく、その間電話調査や郵送式アンケート調査も検討はした。しかし、それらに切り替えるにあたり、調査上大きな問題があった。すなわち、求める内容を聞き出し信頼できるデータを得るため、「調査者が持っている宮古語諸方言に関する知識を回答者と共有する」「被調査者の反応を見ながら聞き方の調整する」というインタラクティブなやり取りが必須であることが調査を行うにつれ明らかになり、これを一方的な回答方式（回答者知人を介さない電話、紙面によるアンケート）等に置き換えるのは難しいことが分かった。また、これらを行うには、1 人あたり一定の時間をかけた面接調査が必要な場合が多く、短期間で多地点の調査を行うことが困難である。これらの反省点と今後の対策も含めて、本研究期間に得られた知見を今後論文などにまとめる予定である。

（２）諸方言の動画資料の収集・アノテーション・公開・保存

上述のように、本研究期間内には 9 地点（大神、狩俣、西原、佐良浜、久松、西里添、上地、来間、宮国）での収録を行い、公開部分についてアノテーションを付与した（西里添を除く）。これらの地域の動画資料は、本研究内で整備を進めたウェブサイトでの公開を進めた。

本研究では、ウェブサイト「みゃーくの方言：宮古語諸方言の記録」https://miyakogo.ryukyu/（科研費 25・40096 で作成したものを大幅に改良）を使用して、データを公開している。本ウェブサイトは、「動画資料がメインコンテンツ」「数十ある方言バリエーション」「アノテーション付資料表示」を見やすく展示することを目的として、上田寛人氏（coban.lab）との相談のうえで作成したものである。トップページでは、「宮古島の地図（地域別）から各地域へのリンク」

「映像資料一覧へのリンク」を置き、どちらからでも２ステップで動画資料にたどり着けるシンプルな構成で、各動画資料を分かりやすく展示している（図 1）。

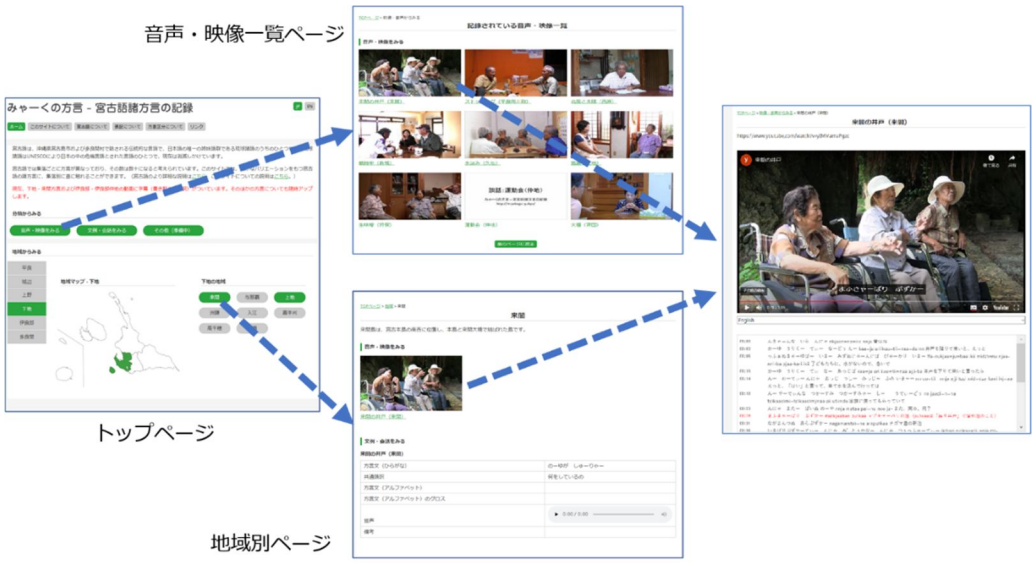

図 1：ウェブサイトの構成

字幕付きの動画は、「動画を止めると字幕も止まり、前後が確認できず、その表示言語に慣れていない学習者が書き起こしを確認するのには適さない」という問題を解決するため、常にスクリプト全体が表示でき、かつ再生中の箇所がハイライトされるシステムを用いている。当初は別財源（電気通信財団普及財団助成研究助成「「何もしなければ」消滅してしまう琉球のことばを、記録、共有して、継承するために」（2017 年度-2019 年度））で開発した組込みの表示システムを使用していたが、システム内で利用していたサービスの仕様変更などにより、最終的には、IIIF（デジタルアーカイブの標準的規格）対応のビューワである Mirador を動画アノテーション対応にしたもの*を使用し、その Mirador のページへのリンクを各動画資料ページにおく形にした。（*開発は、東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター人文情報学部門、一般財団法人人文情報学研究所、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、有限会社フェリックス・スタイル。これらの共同開発による Mirador 動画アノテーション対応版を、JAEL（日本エチオピア諸語研究会）の要望に従って機能強化したもの。参考 https://dh.l.u-tokyo.ac.jp/activity/iiif/video-annotation, https://dev.jael.info/mirador3va/index.ja.html）また、これに加え、言語学習に役立つ訳と逐語訳（グロス）付き談話資料（PDF）へのリンクも動画ページに設けることとした。

本ウェブサイトでは、これまで収集したデータも併せ、9 地点のデータを公開した。図２において、既に地点（●）と収録済だが未公開の地点（〇）を示した。既に公開している地点で、宮古島市の旧市町村（平良市・上野村・下地町・城辺町・伊良部町）におけるすべての地点をカバーしている。

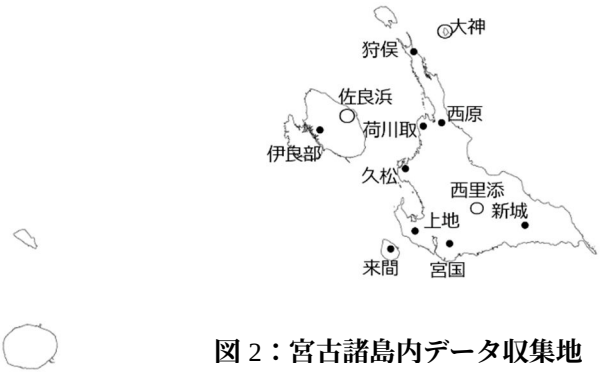

図 2：宮古諸島内データ収集地

また、これらの活動を地域コミュニティ（高等学校）との協働で行うことにより、データ収集や公開に係る作業の円滑化、地域の若年層への言語継承活動への啓発、より使いやすい言語記録の整備などに大きな効果を得ることができ、地域協働の言語記録活動への事例としての成果もあげている。このほか、本活動により収集したデータによる言語分析なども進めた。

＜引用文献・ウェブサイト＞

[1]下地賀代子(2006)「多良間方言の空間と時間の表現」博士論文 千葉大学 [2]Shimoji, Michinori (2008) 'A grammar of Irabu, a southern Ryukyuan language'. Ph.D. dissertation, The Australian National University. [3]Pellard, Thomas (2009) Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS) [4]林由華(2013)「南琉球宮古池間方言の文法」博士論文 京都大学 [5]富浜定吉 (2013)『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムズ社 [6]“デジタル博物館「ことばと文化」” http://www.kikigengo.jp [7]‘ 宮古語プロジェクト ” https://miyako2016colang.wordpress.com/ [8] Himmelmann, Nikolaus P. (1998) 'Documentary and descriptive linguistics', "Linguistics", 36:161-95. [9] 柴田武 (1959)「方言境界の意識」『言語研究』36: 1-30 [10] Preston, Dennis R., ed. (1999). Handbook of Perceptual Dialectology. Vol. 1. Amsterdam: John Benjamins.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Natsuko Nakagawa, Yuka Hayashi	４．巻 29
２．論文標題 Contrastive topic =gyaa in Ikema-Nishihara Miyakoan of Southern Ryukyus	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics 29	６．最初と最後の頁 403- 412
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 林由華，セリックケナン	４．巻 6
２．論文標題 南琉球宮古諸方言における接続形終止用法の機能	５．発行年 2020年
３．雑誌名 方言の研究	６．最初と最後の頁 59-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tomohide Kinuhata, Yuka Hayashi	４．巻 25
２．論文標題 On the Anaphoric Use of Demonstratives in Miyakoan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics 25	６．最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 林由華
２．発表標題 一調査者が言語の継承にどう関われるか？：高校生との協働による宮古島諸方言記録活動の事例報告
３．学会等名 日本言語学会第165回大会 公開シンポジウム「琉球における言語継承活動の現状と課題」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 林由華，宮古総合実業高校生活福祉科，山本史，上田寛人
２．発表標題 地域コミュニティとの協働による宮古島諸方言記録活動の事例報告
３．学会等名 日本方言研究会第112回発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 林由華
２．発表標題 方言か、語か、諸語か：琉球ことばの呼び方の変遷とその背景
３．学会等名 2019年度（第42回）沖縄言語研究センター　総会・研究発表会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 林由華，ケナン・セリック
２．発表標題 南琉球宮古諸方言における接続形終止用法の機能
３．学会等名 日本方言研究会第106会研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 林由華，ケナン・セリック
２．発表標題 宮古語の動詞形態論における拡張語幹：あるべきか、 あらざるべきか
３．学会等名 日本言語学会第157回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hayashi, Yuka
２．発表標題 Documenting the rich dialectal variation of Miyakoan
３．学会等名 The NINJAL International Symposium "Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization"（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 林由華
２．発表標題 宮古語の方言はいくつあるのか
３．学会等名 第 11 回琉球諸語記述研究会ワークショップ
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

みゃーくの方言：宮古語諸方言の記録 http://miyakogo.ryukyu/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関